

県立高等学校の在り方検討委員会での主なご意見（入試制度）

《第4回》

- 県外生を募集している学校もあるが、本県は公立高校入試を3月に実施しているため、県外の学校はすでに合格が決まっており、本県が特色を出して県外生を集めようとしても、入試制度の関係により高知県に来てくれないこともある。
- 積極的に山村留学生を受け入れる市町村もあり、高知県の高等学校へ進学を考えたい子どもも少なくない現状である。県外からの志願については、柔軟な対応を行うことで生徒数の確保につながるのではないかと思う。
- 中学校の学校運営や子どもの心情的な部分を考えると入試は3月にある方がよい。

《第5回》

- 入試の実施時期は、子どもたちにとってどの時期がよいかという視点で考えないといけない。子どもたちの立場で考え、何が重要かを話していかなければならない。
- 社会で求められている力を意識して高校入試がどうあるべきかを考えていかなければならない。
- 企業は世界と競争し、その中でどう生き残れるか、そのための人材を求めている。日本の産業をつくり出していくことができる子どもたちの力を伸ばしていくために、入試がどうあるべきか大きく変える必要がある。
- 中学校でやってきたことを中学生がプレゼンし、そのプレゼンについて高校側が評価できると面白い選抜方法になるのではないか。
- 中学生は人格形成を最も大事にしており、人との関わりを考えながら自分を表現することを行っているので、入試においても集団討論等でそのような部分を評価するとよいと思う。
- 特色化選抜はあくまで例外的に扱い、普遍的にやらない方がよい側面もあると思う。規模感がどのくらいかは慎重に議論をする必要がある。
- 高校の県外受入れについては、キャパシティがいっぱいではないかと思う。どういった思いのある生徒に来てもらうかが非常に重要である。
- 日本語を母語としない子どもが県立高校の受検を拒んでしまう可能性はある。子どもが高校に入ってから対応してもらえるか不安である。
- 新たなものを取り入れるとしても、現場の中学校や高校、教育委員会も、業務の足し算だけではだめではないか。働き方改革という話もあるので、スリム化も必要である。

《第6回》

- 子どもたちにとってよりよい入試制度とは何かを考えたときに、子どもの意見を聞く必要があると思う。
- 何を学びたいかが明確になったうえで学校選びができる入試を行うことが一番だと思う。現在の学力観が変わってきている中で、魅力化・特色化を踏まえた選抜については、何らかの形で入試制度の中に入れていかなければならないと思う。
- 基本的に必要な知識が一定の基準に達しているかを見る必要がある。そのうえで、魅力化・特色化にあわせた入試になると思うため、基本のところを評価できる入試が必要である。
- 入試制度はシンプルにいった方がよい。難しくなり過ぎると保護者も分かりづらい。